

日本地衣学会

No.81

ニュースレター

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次 会員通信291
雲南地衣類調査行2007(その2). 天宝山/原田 浩291

会員通信 From Members

雲南地衣類調査行 2007 (その2) . 天宝山

A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2007 (part 2) / by HARADA Hiroshi

原田 浩 (千葉県立中央博物館)

シャングリラの町から舗装された幹線道路を何キロか南下し、小中甸(シャオジョンディエン)のあたりから東に未舗装道路へと折れ、山ひとつ超えて再び平らな盆地へと出た。ここもチベット族の人々が約を放牧している場所のようである。やがて左に分かれ緩やかに上る道をたどると、その前方には本日の目的地、天宝山(ティエンバオシャン)が待っていた。

昨日の晴れ間はどこへやら、恐れていたとおり雨が降り続き、コンディションは悪い。山道は時にひどくぬかるみ、RV車でも通行が困難となることがある。私たちの調査は、いつも腕の良いプロのドライバーが運転してきたが、それでも何度かあきらめたことがあった。さて、今回はどうだろうか?

ここで、調査の一行を紹介しておこう。図1の左からワン(王立松)さん、ラオワン(王華)さん、フー(和順進)さんである。車は、フーさんの三菱パジェロである。



図1. 調査一行(著者を除く).
詳細は本文を参照.



図2. 地衣類で覆われた針葉樹の樹幹。フクロゴケ属が多い。裏側にはカプトゴケ属が生えていた。

* * *

まずは天宝山の麓までは難なくたどり着いた。そこは、小さな盆地となっていて、小川が流れ、その流れに沿って道が続いている。盆地には草原が広がり、ところどころにカシの低木が混じるという、シャングリラ周囲ではよく見られる風景である。停車した場所は標高約3500m、アヤメの仲間の群生地であった。きっと夏の初めには、群青の花が一面に咲くことだろう。しかし時は晩秋であった。やや上流に目を転じれば、小川のほとりには、モミの仲間や、シャクナゲの仲間、ヤナギなどが混じって疎らな林を作っていた。流れの上にせり出たヤナギには、カプトゴケ属の *Lobaria yunnanensis* が径50cmほどの地衣体を作っていた。モミの幹にはカプトゴケ属を始め、フクロゴケ属 *Hypogymnia* が多い(図2)。日本とは多少とも種類は違うようである。元

はもっと密な森林だったのだろうが、建築用材として針葉樹が随分と切られているようで、切り株や丸太が転がっていた。こういったところは、アカミゴケの仲間の群生がしばしば見られるが、期待通りであった。

ハリガネキノリ属を狙うためになるべく高い場所に行こうという方針から、一休みの後に斜面を登る枝道をたどることになった。道は荒れてはいたが、フーさんが駆るパジェロの前では問題ではなかった。標高3900mほどの林道終点に到着した。針葉樹のモミやトウヒの仲間が多い。その枝にはナガサルオガセ *Usnea longissima* だけでなく、ハリガネキノリ属がところ狭しと“突っていた”。しかし昨年見た老君山(本誌77号)ほどではないが見事である。広葉樹としてはナナカマドの仲間や、シャクナゲの仲間も見える。特に一本のナナカマドには、様々な葉状地衣と樹状地衣のオンパレ



図3. 天宝山のナガサルオガセ。モミ属の枝に無数に垂れ下がっている。右後方には、小川の対岸の山が見える。

ードである。アツバヨロイゴケ *Sticta wrightii* のシアノモルフとみなされる *Dendriscoaulon* (Takahashi *et al.* 2006) も見つかった。しかしここで私の最も強い印象として残ったのはナガサルオガセだった。静かな雨に打たれてとても美しかった(図3)。

ひととおり調査を終え、谷まで戻り、今度は更に上流に向った。しかしそれも100mも行かないうちに頓挫。道がひどくぬかるんでいる上に、地元民(?)が切り倒した針葉樹の丸太が何本も道をふさいでいたというわけだ。そこで、対岸の斜面を登っての調査とあいなった。雨の中での調査と思うと憂鬱であったが、しかしここは雲南、せっかく来たのだからと気を取り直す。

石灰岩の山であることは明らかであった。長径10から40cmほどの角礫が堆積した崖錐の斜面は恐らく高

さ200から300mに及び、両側の山塊から谷底まで到達している。斜面下部ではカラマツが生え、地衣類にとって良い着生基物となっていた。カラマツの枝先にはハリガネキノリ属も多い。やや登ると、紅雪茶 *Lethariella* をカラマツの幹と枝先に確認した。地上にはムシゴケ *Thamnia* もあった。雨の中、対岸の山頂部は霧に隠れ、水墨画の世界を見るようだった。

雨の中の調査はとても効率が悪かった。濡れてしまうと地衣類の同定は難しい。暗いと更に見えない。それにも増して、身体が冷え、体力と気力がそがれてしまう。このため長時間の調査はできない。そこで、山を下り、帰りがたら道端でラオワンさんの短時間の調査に付き合うことになる。と言っても、盆地の真ん中の草原には地衣類は無かった。止む無く、というより、嬉々として路傍の花の写真を撮ることにした。こんなこともあろう

かと、今回の調査には、三脚と接写に強いデジカメを用意していたのだ。・・・しかし、このときはまだ十分に使い慣れていなかったため、皆さんにお見せするほどの写真は取れなかった。代わりに、この日に撮ったアカミゴケ(?)の写真(図4)をご覧ください。



図4. 天宝山のアカミゴケ類。土手に生えていた。切り株の上には、別の種類が多かった。

無事に着けるの?

意外なところに落とし穴はあった。フーさんのパジェロの左前輪の様子がどうもおかしい。幹線道路に出てから、ついに走行不能となってしまった。シャフトにトラブルがあったようで、左前輪があらぬ方向を向いてしまっていた。不幸中の幸いは、ここがシャングリラの近くだったことだ。地元の森林管理署の署長(?)とは、フーさんは親友なのだそうだが、昨晚、シャングリラのレストランで一緒に銅を囲み盃を交わしていた。フーさんは親友に携帯電話で相談し、修理の手配を済ませる一方、フーさん以外の我々3名は、親友氏のRV車に乗って一足先にシャングリラに帰ることができた。

さて、明日はどんな地衣が(あるいは苦難が)待っているのだろうか?

(つづく)

引用文献

Takahashi K., Wang L.-S., Tsubota H. & Deguchi H. 2006. Photosymbiodemes *Sticta wrightii* and *Dendroscocaulon* sp. (lichenized Ascomycota) from Yunnan, China. J. Hattori Bot. Lab. (100): 783-796.

●複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 80号 290ページに。

●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 80, p. 290 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 81, pp. 291-294: eds. Harada H. & Kinoshita K., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 20 December 2007.

日本地衣学会ニュースレター 81号

発行日：2007年 12月 17日

編集：原田 浩・木下 薫

発行者・発行所：日本地衣学会

〒010-0195 秋田市下新城中野

秋田県立大学生物資源科学部生物生産科学科内

©2007 日本地衣学会 (© 2007 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複写等は固くお断りいたします。